# 元気な高齢社会のために

## 第12回 立山倶楽部会議報告

平成18年10月17日(火)



## 「立山俱楽部」 会議概要

### 目次

「立山倶楽部	八会議概要
1半川沃木川	儿女戟似女

◆目	程	1
◆参 加	者	2
▲写.	直	1

#### Ⅲ「立山倶楽部」会議内容

◆開会あいさつ 中沖	豊	5
◆趣旨説明 八木	近直	6
◆話題提供與野	達夫	7
◆各参加者より 石川	純子	10
	孝子	12
·····································	晴彦	15
▲ 辛目 六 協		17

## 日程 平成 18 年 10 月 17 日 (火)

### 場 所 富山全日空ホテル

## テーマ「元気な高齢社会のために」

#### 「立山倶楽部」会議開催の趣旨

国際的に活躍されている方々から、未来への洞察、世界の潮流、人間の あり方などについて、自由かつ率直に意見交換していただくための交流の 場として、平成6年から「立山倶楽部」会議を開催している。

この会議の意見交換内容から、時代を先取りする見方・考え方を県政の 創造的な施策に反映させるとともに、グローバルな視点から未来を考える 人材の育成に資する。加えて、参加者に「とやまファン倶楽部」の会員と なっていただき、全国から富山を応援していただく。

## 参加者



石 川 純 子 ノンフィクション作家



**奥 野 達 夫**NPO法人 グリーンツーリズムとやま 理事長



補 井 孝 子お茶の水女子大学 名誉教授·客員教授



#### 濱 口 晴 彦

早稲田大学 名誉教授 創造学園大学 教授



#### 中 沖 豊

財富山県ひとづくり財団 理事長



#### 八 木 近 直

財富山県ひとづくり財団 副理事長

(敬 称 略)

## Photograph





## 「立山倶楽部」 会議内容

#### 開会あいさつ

#### 中 沖 豊

)財富山県ひとづくり財団 理事長



秋空に立山連峰が映えるさわやかな 季節を迎えていますが、本日は皆様方、 大変ご多用の中をこの立山倶楽部にご出席いただき まして、誠にありがとうございます。

はじめに、この会議の代表世話人であります木村 尚三郎先生には、第1回の会議から大変お世話になっており、本日も座長をお願いし、準備を進めていましたが、大変残念なことに今回体調不良のためご 欠席ということになりました。皆様方にはくれぐれもよろしくということですので、ご理解をいただきたいと存じます。なお、本日の司会進行につきましては、富山県教育委員長であり、当財団副理事長の八木近直が務めますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

この「立山倶楽部」会議は平成6年に第1回の会議を開催して以来、今回で第12回を迎えるわけですが、これまで歴代の出席者の皆様方から、富山県発展のための大変貴重で、またユニークなご提言をいただいてきております。改めて皆様方にもお礼を申し上げたいと存じます。

さて、現在我が国は少子高齢社会を迎えておりますが、こうした中、いかにして活力ある社会、幸せに生きる社会を築き上げていくかが問われているところです。これからは社会の支え手として、高齢者

の生き方を捉え直していくことも必要であろうと思われます。また、いわゆる「団塊の世代」の大量退職を迎えて、社会経験が豊富で技能もあるこの世代を新たな地域づくりにいかに活用していくかが極めて重要ではなかろうかとも思っております。

本日は「元気な高齢社会のために」がテーマとなっておりますが、退職後ますます元気な高齢者をどうこの社会に活用するのか、あるいは高齢者は社会の中でどのように元気に活躍すべきかについて、皆様方から幅広い率直なご意見をいただければ大変ありがたいと思っています。これから本当に大事な時代を迎えるわけですが、皆様方の一層のご指導、ご協力をお願いしたいと思います。

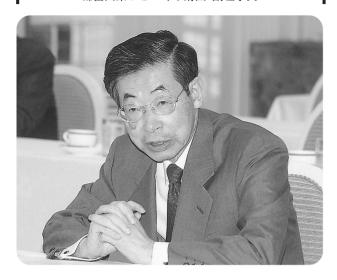
本日は、どうぞ時間の許す限り率直なご意見やご 提言、富山県民が明るくなる話もお聞かせいただけ ればと思います。それでは、どうぞよろしくお願い します。



#### 趣旨説明

#### 八木近直

側富山県ひとづくり財団 副理事長



四事長からのごあいさつにあり ましたように、この「立山倶楽部」

会議は平成6年に始まりました。当時、理事長は県知事で、この会議はいわゆる賢人会議のような性格を持っており、当初は非公開の会議でしたが、その後、現在のような形になってきました。ここでは、富山県のこと、あるいはこれからの時代について、ざっくばらんに、自由、活発なご議論をいただければありがたいと思っています。そして、いろいろ出ましたご意見やご提言の中から、県政に生かすことができるものがあれば、そのようにもしていきたいというのが当初からの考え方です。

今回のテーマは「元気な高齢社会のために」となっています。先日、敬老の日に、総務省から日本の65歳以上の高齢者の人口が2,640万人と発表されました。全人口に占める65歳以上の高齢者の割合、つまり高齢化率は20.7%になり、世界最高水準の長寿国になったということで、そのこと自体は誠にめでたいことですが、一方では問題も出てきていると思われます。5人に1人が高齢者という状況ですし、さらには先ほど理事長からもお話がありましたが、「団塊の世代」といわれる方々が明年以降、定年を迎えられる時期にも立ち至っています。そのような事柄を考えてみれば、この高齢社会をもう一度よく考え

直してみる必要があろうと思うわけで、そうしたことを踏まえて、本日お集まりの皆様方にはそれぞれの立場からご自由にご発言いただければありがたいと思います。

今、田舎暮らしのよさが見直されており、団塊の 世代の方々をそれぞれの地域に呼び込もうというこ とで、就農や農村暮らしを希望する人が定住される よう、あるいは週末だけでも地方で暮らそうという 方々のために、各種事業が全国で行われています。 富山県でも、今年度から「ときどき富山県民」事業 として、特に首都圏に居住しておられる団塊の世代 の方々を対象に、モニターツアーをしております。 また、中高年の方が田舎暮らしを体験する「とやま 帰農塾」も行われています。

今日はその「とやま帰農塾」の塾長をなさっており、またNPO法人グリーンツーリズムとやま事務局にいらっしゃいます奥野さんがおいでですので、まずは話題提供ということで、お話をいただければと思います。奥野さんのお話が終わりましたら、皆様方からそれぞれひとわたりお話を伺って、その後自由活発なる討議にさせていただければありがたいと思います。では、よろしくお願いします。



#### 話題提供

#### 奥 野 達 夫

NPO法人グリーンツーリズムとやま 理事長



私の場合、ほとんど現場で仕事をしているので、現場で日頃接している富山の元気なお年寄りのことを中心にご報告して、後の話題のきっかけにしていただければと思います。

私はグリーンツーリズムもさることながら、福光 美術館の館長もやっていますので、いろいろな人た ちと出会う機会が増えています。福光美術館は、非 常に緑豊かな森の美術館です。私は非常勤嘱託で、 あとは監視員やパートの人たちが多いのですが、い ちばん給料の安いのはこの庭を午前中掃除してくれ るシルバー人材センターから派遣された吉江さんと いう66歳の方です。りっぱなお屋敷に住んでおられ る方で、時給800円でそんなに働かなくても、と言 うのだけれども、働くのが大好きで、この美術館の 庭が毎朝きれいになるのがうれしくてうれしくてと いうことで、本当に頑張ってもらっています。スタ ッフの中でも信用があり、しかもお客さんのアンケ ートは、非常に環境がきれいで、絵がゆっくり見ら れたというのがほとんどですから、いちばん貢献し ている人だと言えます。

福光美術館の分館は、棟方志功がかつて住んでいました小さな15坪ほどの家で、「愛染苑」そして「鯉雨画斎」といいます。この分館には女性2人、男性2人の4人のスタッフがおり、70歳近くの人ばか

りでいちばん上は72歳です。棟方志功がこの家でど ういう生活をし、どういう人たちと交流し、どんな 仕事をしていたかを、語り部として熱心に説明して いただいています。元気に頑張ってもらっており、 年齢は全く感じさせません。町の中にある小さな施 設で、特に宣伝していないのですが、お客さんの7 割ぐらいが県外からいらっしゃいます。

そのすぐ向かいの通りには、不思議な食堂があり ます。「春の色食堂」というレトロな、建物としては 143年前に造られた加賀藩の米蔵を改造したレスト ランです。当時はハイカラだったのですが、それを 83年前に改装して食堂にしました。そのおやじさん は田畠さんという方で、現在80歳です。おでん屋の おやじさんで、ずっと金沢で修業してきて、淡々と 50年間変わらない味を提供しているのですが、町の ど真ん中にあり、この味を求めてわざわざ来る人た ちがたくさんいらっしゃいます。ラーメンなどは本 当に50~60年前の懐かしい味がしますが、かつてそ ういう食材がなかった頃は、昆布だけのラーメン、 昆布そうめんを作ったということで、これがまたお いしかったといいます。町の名物のじいちゃんで、 夕方になると商店街の奥さん連中が手鍋を下げて、 残ったものを晩飯のおかずにするために買いに来る のです。

それから、私の現在住んでいます魚津に白倉小学 校があります。これは早月川の上流の、もと松倉金 山があったところで、23年前に、子どもが減って休 校になりました。地元の人たちが廃校ではなく休校 にさせていたのですが、昨年とうとう廃校になり、 地元の最後の校長先生である小西宗右衛門さんとい う現在84歳の方を代表にして市と掛け合って、 「NPO法人グリーンツーリズムとやま」でその後の 運営を受けることになり「しらくら山の学校」とい う名前にしました。村の明かりを消すなということ で、我々の仲間の若い人がここに常駐して、ここで よく「職員会議」というか運営委員会をやるのです が、黒板には23年前の閉校式のときにチョークで書 いたものがそのまま残っています。今、改修しなが ら、子どもたちの野外学習の場にしたり、地元の人 たちの交流会の場にしたり、いろいろなことを始め たところです。

開校式のときの写真で、真ん中にいたのが小西校

長先生で、教育長と一緒に看板をつけて、グリーンツーリズムとやまの東の拠点の一つにしたいということでやっています。この方は、本当に年を感じさせません。今、田んぼ一枚を借りて、都会の子どもたちや町の子どもたちと一緒に40人ぐらいで田植えから稲刈りなどをやっていますが、今は収穫祭の中心になって、稲の東ね方、刈り方を教えています。今ではみんなコンバインでやりますので、昔を思い出しながら一生懸命やってもらっています。

そこの小学校では、これまで2回、白倉山の中山間地のフォーラムをやりました。山里ですが、非常においしい米がとれるところで、食味計で計測したら、魚沼郡の米よりおいしかったのです。そこで、村の人や都会の人たち、あるいは子どもたちなど100人余りを集めて、おにぎりで交流会をやったのですが、そのときの中心になっておられたのが富山大学の西頭学長です。農業経済学のご専門だったのですが、明治・大正・昭和と、どのように米をめぐる農業が変わったかという基調講演を、大学の講義のような感じでやっていただきました。そのとき、この魚津は米騒動発祥の地でもあるということにも触れていただきました。

魚津の海岸の町には、米騒動ゆかりの建物である、 当時の米蔵2棟が今も残っていて、90年経っていま す。周りを全部石で組んであるので、壁がはがれた ら石が出てきました。屋根だけは傷んでいるのです が、あとはしっかりしていて、漁具が入っています。 この90年の風雪に耐えた米蔵を何とか保存できない ものだろうかという話が出てきまして、米をめぐる フォーラムをやりながら、この保存運動を語り合い ました。そして今いろいろな有志が勉強会を始めて います。

ちょうど今年は米騒動から88年、米寿を迎えました。私が魚津へ住居を移してから2年ぐらいなのですが、どうも米騒動の話をしてもみんなピンと来ない。国に刃向かった、抵抗したということ、それと「騒動」という言葉のイメージとで、マイナスイメージで捉えられているのです。そうではなくて、米寿でめでたいのだからプラス思考で、日本の歴史に必ず登場する米騒動をもう一度見直したらどうかとずっと提唱しながら、フォーラムや勉強会をしているところです。そして行政と連絡調整をしながら、歴

史遺産である米蔵2棟を残せないかと今語り合って います。

しかも、この中心になったのは女性たちで、ここは日本の女性の歴史の中では必ず登場する聖地です。 民衆、漁村の女房たちが、時の内閣まで総辞職させたすごいパワーの、唯一の語り部だったのが地元の浜多きくさんという方です。残念なことに、10日ぐらい前に亡くなりました。意識はしっかりしていましたから、何とか枕元ででもインタビューしたかったのですが、とうとう間に合いませんでした。私が編集している『富山写真語』・万華鏡』の『米蔵』に紹介してありますので、ご覧になっていただければと思います。このあとがきで、当時の米屋さんの跡を継いでいる息子さんが語っています。このおばあちゃんは、米騒動を11歳のときに体験している非常に貴重な存在で、99歳までそれを語り継ぐことを生きがいにしておられました。

今度はもう少し西のほうへ飛び、医王山のふもとに小矢部川が流れており、刀利ダムが松村謙三さんの尽力でできたのですが、そこには山の文化が生きていました。ダムができてから廃村になって、文化は絶えたのですが、資料館はかろうじて残っています。けれども、鍵をかけたままで、中には数百点の山の民俗資料が全部残っているのです。

そこに住む嵐龍夫さんという方は、78歳で元気に 山仕事をし、シイタケも栽培しています。ちょっと 足が悪いのですが、本当に山の中を一人で元気よく 歩いていかれました。『万華鏡』の『樹皮』にも特集 してありますので、見ていただければと思います。

実は山に生えている木で、役に立たない木は一つもない。特に樹皮を使い、生かす文化は、分かっているだけでも新石器あるいは縄文の頃からですから、5,000年の歴史があるのです。人類は石や土器だけではなくて、ほとんどは身の回りにある植物を加工・利用して、食べたり、身の回りのものを作ったりしていたわけですが、それは全部腐ってしまって残らない。だから考古学の人たちも、断片的なものを集めて推測するしかないのです。北海道のアイヌやシベリア、アラスカまで調べますと、富山の山奥の村の樹皮の加工技術とほとんど一緒です。つまり、数千年の東アジアの山の文化や森林の文化が、そのまま40年前まで生きていたわけです。それが薪、炭が

石油に代わってからきれいになくなった。5,000年の 記憶を、この人たちがかろうじて持っているのです。

その利用のしかたの一つが、例えばキハダという、これは皮をむいたら本当に真っ黄色の鮮やかなもので、富山の薬の熊胆(くまのい)に使われていました。樹皮を使ったミノゴというのがあるのですが、これは木の皮をはいで腐らせて、中の表皮だけを編んで、それを藍で染めた麻糸できれいにかがったもので、ほとんど民芸の世界です。そして背中のよく当たるところに木綿の端布をつけて、背中に当てる。これで70~80年経っており、人間より長持ちすると言っていました。こういったものは今、あちこちに収蔵してあるのですが、資料館として飾っても人が入らないということで、閉館したり払い下げたりしており、もったいないのです。人類の何千年の歴史が富山県にもたくさんあり、それを語り伝える最後の人という感じです。

こういった歴史が消滅するのは非常に残念だということで、『万華鏡』ではほとんどボランティアで、 せめて記録だけでも残していきたいと思っています。

話があちこちに飛びましたが、今、氷見や五箇山などでも、いろいろな人たちが都市と農村の交流などを組織立って、あるいは手作りでやっています。ずっとこういうおつきあいをしていると、高齢者、70~80代の人たちがとても素晴らしい知恵を持ち、伝承していることにいつも驚かされます。その方々の記憶が今どんどん消えており、本当に焦りを感じるのですが、こういう人たちは自分からは何もやりませんので、それを学ぶチャンネル作り、いろいろなメディアや仕組み作りで、そういう語り部を生かして、次の世代にバトンタッチするような世代間交流を、仕掛けていかないといけないのではないかと思います。

グリーンツーリズムという都市と農山漁村の交流で、外国まで含めて異文化との出会いの事業にずっとかかわってきました。特に利賀村と都市との交流や国際交流に30年ほどおつきあいしていました。現在はお年寄りばかりで800人ぐらいの村ですが、そのお年寄りの人たちが異口同音に言われるのは、ここ10~20年の利賀村と異文化との交流のおかげで、お年寄りの表情が明るくなったということです。長生きすると、どういうことが次に起きるか分からな

いという、わくわくする感じがたまらないということで、元気がいいのです。まして、そういう山村で育った人たちですから、異文化と交流することはとても刺激になっているように思いました。

単に田舎暮らしといっても、富山県の場合は兼業 率が高いのと、周り中が自然だらけで、県民自体が ほとんど毎日グリーンツーリズムをやっているよう な環境ですから、運動も困難を極めています。しか し、異文化との出会いをするための素材や人がたく さん残っているという気がします。その意味で、団 塊の世代、60歳前後の人たちの役割は、コーディネ ーターの役割というか、都市と農山漁村との交流、 あるいは世代間交流、70~80代の人たちと孫・曾孫 みたいな子どもたちや若い人たちとの交流の場をど のように進めるか、だと思います。得てしてそうい うことは女性が中心になってしまうのですが、そう ではなく、年金ももらって健康で働けるのだったら、 男が世代間交流のコーディネーター役にもっと本気 になって取り組む必要があるのではないかと、私自 身のことも含めて思います。そうすると、高齢者の 問題、あるいは子育てとか教育の問題についても、 周り中にこういう先生もいれば、教材もたくさんあ るわけですから、富山県も捨てたものではないので はないかと思います。だいたい予定の時間がまいり ましたので、皆さんの話のきっかけになればという ことで私の報告を終わります。

#### 各参加者より

#### 石 川 純 子

ノンフィクション作家



何千年の歴史を語り伝える最後の人たちがたくさんおられて、それを何とか残せないかということですが、私はこれを聞き書きという方法で長い間やってきました。もしかしたら何かヒントになるのではないかと思いますので、ちょっとお話しします。

私は、主におばあさんたち、媼の聞き書きをやってきました。なぜかというと、農婦という、体を農機具にして作物を育て、命も育てた女の人たちの感性が私の根っこだと思いますし、その農婦が持っている感性や考え方が、今70代後半以降の人たちを最後に、この世の中から全部消えていくからです。そういうものがこのまま消えてしまっていいのだろうか、ということで始めたのがおばあさん巡りで、200人ぐらいに聞いて、ずいぶん書きました。

短いものは単発で書いたのですが、まつを媼、それからさつよ媼という素晴らしいおばあさんに出会いまして、このお二人はとても短いものにはまとめきれなくて、『まつを媼 百歳を生きる力』と『さつよ媼 おらの一生、貧乏と辛抱』という2冊の本にまとめました。その中で、とびっきり元気な高齢者のモデルになると思うのが、まつを媼です。こういう高齢者も、岩手県の、それこそひなびたずっとずっと向こうの田舎にはいるのです、ということで、

ちょっとだけ紹介したいと思います。

この『百歳を生きる力』という題のとおり、数えでいえば100歳まで生きられた方です。明治27年生まれで、師範学校を出て17年間先生をしており、当時とすれば超エリートの方ですが、農家に嫁いでいますから、その後は、ずっと70年間近く農婦だったわけです。農家の嫁勤めも経験しましたし、大変な前半生があるのですが、ここでは90歳を過ぎてから、どんなことをしたのかを簡単に紹介します。このまつを媼の口癖は「長生きの秘訣は希望が絶えないことだよ」というものでした。では、その希望とは何だったのか、何をやったのかというと、夫が10歳のときから書いた日記が遺っており、90歳代になってから、それを3年間かけて全部清書して、その中から抜粋して『日記抄』を出版したのです。

それから、この方は戦前戦後と村の生活改善運動の先頭に立ってきた人なので、その運動に携わった女の人たちの感想文をおばあちゃんたちみんなに書いてもらって、それを一冊にまとめるという仕事をしました。

生活改善運動の人ですから、生活そのものも亡く なるまで生活改善です。例えば98歳のときに、これ からは下着を汚すのが心配で、それを自分で洗いた いというので、廊下に洗濯機を設置して、ポンと投 げて洗うという気迫なのです。それから、自分の部 屋のそばにお風呂を作りました。どうしてかという と、90歳代になりますと、白内障で目が見えなくな ってくる。夜になって蛍光灯の下だと、はっきりと 見える。そうすると夜の時間が大変貴重なのです。 ところが、家族のお風呂だと夕食が終わったら「さ あ、おばあちゃん、お風呂だよ」と言われて入り、 部屋に戻ってくると湯冷めするし、疲れて夜の時間、 仕事ができない。そこで、寝るときにお風呂に入っ て、その前にはやっと見えるようになった目を使っ て、新聞を読んだり手紙を書いたり、それから『白 寿の青春』という詩集を書いたりされたのです。全 く見上げた長寿の知恵で、自分の体が衰えていくの に負けないように、どうしたら制御できるかという ことをやっていった人です。しかもそれをともに生 活改善をやってきた村のおばあちゃんたちにも、「お れはこうしたから、あんたたちもやってみたら」と、 99歳までやって見せていった人なのです。

中でもきわめつけは、このおばあちゃんが人生の最後にやった二つのことで、一つは自分の文庫を作ったことです。主義をとは別に、四畳半ぐらいの建物を作り、そこに自分の100年間が全部分かるように整理したのです。例えば生活改善運動の資料や、自分が17年間先生をしたときの資料や、9人の子どもたちの残した手紙なども全部、原稿用紙に清書してしまいました。それから、ものすごいぼろも全部しまいました。私が行くと「純子さん、昔の東北の百姓がどんなに貧乏だったかは、なんぼ語って聞かせたって分かるもんでねえ。これを見たらわかるべ」と。つまり何が価値なのかが分かっていたのです。そういうのをすべて遺して、文庫を作って亡くなりました。

「知ってるつもり!?」という番組が、以前ありましたが、その最後のほうでこのまつを媼が「日本の母」として紹介されました。そのときに、日本テレビから資料はありませんかと電話が来たのですが、すべてその文庫から送って、その資料で番組が作られたのです。

もう一つは、「白寿の青春」という、99歳と青春 をドッキングさせた言葉を生み出して、『白寿の青 春』という詩集を書きました。

なぜ90歳でこんなパワーが出てきたかというと、 89歳で同じ年の夫が亡くなったのです。この夫は理 想農村建設を唱えて、それで恋愛結婚したはずなの だけれど、嫁に行ったらものすごい暴君で、最後ま で暴君だったので、だまされたと思い、夫の晩年に は仇を取ってやるとさえ思ってきたのです。ところ が、膨大な日記が遺されていて、それを夫が死んだ 後読んだのです。その日記の中に「すまなかった。 まつをを叱った。許してくれ」というのがいっぱい 出てきた。最後には「おまえは、おれの70年間の秘 蔵のダイヤモンドだった。おれが村のことを一生懸 命やれたのは、すべておまえのおかげだった」とい うようなことがずっと書いてあって、びっくりした のです。この夫の真情に触れたときに、夫にとって 自分は何だったのだろうと、夫に向いていた刃が今 度は自分に向いたのです。今までは夫が憎い、だま されたと思っていたのが、「なんて私は浅はかだった のだろう」と変わっていったのです。本当に革命的 なことが、この89歳のときに起きたのだろうと思い ます。

それがパワーになって、おばあちゃんの心の丈が どんどん高くなり、修行された方のような、仏に近 いような心に変わっていくのです。そういう中で、 懺悔録を書かなくてはいけないということで、その 題名が最後には『白寿の青春』となりました。恋愛 結婚する前に夫からもらったラブレターを最初に入 れたから『白寿の青春』となったのですが、「おばあ ちゃん、そのラブレターをどうやってしまっておい たの?」と聞いたら、「暗記していた」と言うので す。

そういうドラマがありまして、それで私はこのおばあちゃんのことが大好きで、23年間行って教えていただいたのですが、「純情の道ひとすじに音楽を歩みしいのち我に悔いなし」という辞世の歌を私に託して亡くなりました。私はちょうど亡くなる1週間前まで行っていたのですが、帰るときに雪がたくさん降って、なかなか自動車が入ってこられなくて玄関で待っていたら、ピアノに向かって蛍の光を弾いてくれたのです。それが私との今生の別れになってしまいましたが、こんなパワフルな90歳代を生きられ、命を見事にしまわれたおばあちゃんがいるのです。

その根底にあるものは、夫は明治の男だから表には表せなかったけれども、実は恋愛結婚したときと同じように凛々と愛情は続いていたのだ、自分は愛されていたのだと分かった、ということです。高齢者が元気になるというのは、愛されていることなのだなと。そして、そこから生まれてくる希望、それからこのおばあちゃんの見事な自立の精神を、私はたまたま聞き書きをやっていたために、最後にはそういうところまで教えていただくことができました。高齢者でも、こういう方がいらっしゃったという一つのモデルのようなお話をさせていただきました。

ところで聞き書きですが、高齢者が元気になるためには、この聞き書きがとてもいい手立てになるのではないかと、私は自分の経験から思っています。通ってお話を伺うわけですが、おばあちゃんの人生に共感し、本当に尊敬の気持ちでお話を聞かせていただくと、おばあちゃんがどんどん元気になっていくのです。耳が聞こえなかった人が、私が行くと耳がよくなってきたよと言うのです。

例えば、次にまとめたさつよ媼は、『おらの一生、 貧乏と辛抱』という本の中でこのように言っていま す。「しゃべりだしたら、がおった(弱った)体が、 息あがった(息を吹き返した)ような気持ちだった でば。たまげたもんだねえ、しゃべるって。ほかの 人には分からないべが、しゃべると気持ちがうんと 愉快になる。しゃべると楽しいの。ほれ、苦労した こと、心さも頭さも体さもいっぱい詰まってるから、 それ、しゃべると一回ごとに心がすーっとなって、 体もすーっとなって、自分が愉快になる。こんな96 なんて、こんな年まで生きてこられたのも、そのた めでねがすか(ないかな)。だから、おら、ここに来 て話するの楽しいよ」と。このさつよおばあちゃん は学校にろくに通わなかったから、ひらがなとカタ カナは読めるのですが、ひらがなもろくに書けない のです。私は話を伺って、帰った後には必ず、おば あちゃんにありがとうとひらがなだけで、お礼のは がきを出しました。そうすると、このおばあちゃん は、私に返事を書かなければいけないということで、 字を練習するようになりました。「春」という漢字を 覚えたよとか、「死ぬ」という漢字を覚えたよと、漢 字も増やしていって、私にひらがなとカタカナ混じ りのはがきをくださるように変わっていくのです。

そういう意味で、聞き書きというのは、とてもお 年寄りを元気にしますし、それだけではなくて、お 年寄りが持ってきた本当にありがたい知恵を、たく さんいただくことができるのではないかと思います。

私のふるさと宮城県には、こういうことわざがあります。「年寄り一人が亡くなると、文庫蔵が一つ焼けたと同じだ」。つまり、沢山の本に匹敵するぐらい、体でつかんだ知恵を持っていらっしゃるわけです。だから聞き書きは、おばあちゃんも元気になるし、私たちは知恵をいただくことができるし、広く言えばいわゆる庶民の歴史も残すことになるということで、とてもいい手立てではなかろうかと思います。

今、宮城県でNPOのグループ「聞き書き村」を作ったので、そこに入れてもらい、みんなで書きあって、小さな小冊子を作って毎年ためていっています。聞くところによりますと、秋田でも同様のグループを作ったそうです。きっかけになったのは、秋田や岩手は自殺率ワースト3にいつも入っており、聞き

書きが自殺予防に役に立つのではないかということ もあったという話を聞きました。そういう意味でも、 聞き書きのグループを作って進めていったら、何か の手立てになるのではと思います。

#### 袖井孝子

お茶の水女子大学 名誉教授・客員教授



たほど奥野さんのお話を聞いて、大変ショックだったのは、魚津の米騒動が地元ではネガティブイメージで捉えられているということです。女性運動や女性の問題に関心のある人にとっては本当に聖地なので、本当にびっくりしました。

私は内閣府男女共同参画会議の議員をやっておりまして、今月末に安倍内閣になって初めての官邸での会議があるのですが、男女共同参画局の初代局長は富山出身の坂東眞理子さん(現 昭和女子大学副学長)です。彼女は本当に頑張っていますし、それからもう一人有名なフェミニストは東大教授の上野千鶴子さんです。富山県は本当に米騒動以来、強い女性をつくってきたと思うのです。ですから、地元でそうなのかと非常に驚きました。

それから富山県といえば、もう4~5年前になりますが、私が日本労働研究機構で育児休業に関する調査をしたときに、富山の富山市と高岡市、東京の杉並区と足立区を比較調査しました。なぜ富山県を選んだかというと、既婚女性の就業率が非常に高く、育児期も辞めないからです。東京、特に杉並の場合

は退職してしまうのですが、富山の場合は継続して いる人が非常に多い。それからもう一つびっくりし たのは、育児休業を取らないで働き続けている人が かなり多い。これは何なのだろうと思ったら、同居 率が高いのです。ですから、おばあちゃん保育とい う形で、女性の就業ができているということです。 もちろん、私はおばあちゃん保育を必ずしも推奨し たくはないし、おばあちゃんに育児を全部おんぶし てしまうことは賛成ではないのですが、そういう形 で女性の就業ができていることは素晴らしいと思う し、社会的なサービスと組み合わせて、女性が働き 続けられる社会を作っていけることは、とてもいい と私は思っています。ただ、高齢の女性たちのほう には意見を聞いておりませんので、育てる側に回っ た女性たちが本当に喜んでやっているのかどうか、 そのあたりのことを知りたいと思いました。

それから、私は高齢社会の問題をずっとやってきています。一つがシニア社会学会で、初代会長が木村先生、今は二代目の会長で資生堂名誉会長の福原義春さんです。私と慶應義塾大の清家篤先生が副会長で、濱口先生が運営委員長という形でやっております。今日のテーマは「元気な高齢社会のために」ですが、このシニア社会学会は、まさに「アクティブシニア」、高齢者がいつまでも元気で社会参加・社会参画できることをねらいとして作った団体です。

この団体の英語名は、Japan Association for Ageless Societyです。シニア社会学会というのは、木村先生には、関西弁の「死にや」に聞こえるので「あまりいい名前じゃないね」と言われてしまったのですが、英語のほうが本題に近いのです。Ageless Societyという英語を「エージレス・ソサエティ」という日本語にしなかったのは、「エージレス」という言葉が、日本語ではまだあまりなじみがなかったからで、一般的な「シニア」にしたのです。

agelessという言葉は、年を取らない、あるいは年齢を超えてという意味です。これを最初に言ったのはアメリカの女性作家のキャロライン・バードさんという人で、30年ぐらい前にoldとagelessという言葉の使い分けをして、oldというのは年を取ってしまう人、私はもう年寄りだからできない、とあきらめる人ですが、agelessというのは、まさに年甲斐もないということです。年齢を超えて活躍し続ける人、

年齢を理由にしない人ということなのです。

彼女は、高齢者こそ社会的に活躍できるのだと言っています。それはなぜかというと、一つは家族を扶養する責任から自由になることです。働き盛りの頃は、妻子を養わねばならないということで、生活に追われ、本当に好きなことができない。今たくさんの人が働いていますが、本当に好きで仕事をしていらっしゃる方は少ないと思うのです。ほとんどの方が義務感で、しかたがなくて働いていらっしゃる。けれども、仕事を辞めて自由になれば、そういう家族を扶養する責任から自由になれると思うのです。それからお金の心配をしなくていい。もちろん、なければ困りますが、そういう金銭にとらわれる必要がないと言っています。

それから社会的な評価にこだわることがなくて済む。現役の時代ですと、例えばお隣どうしなどで、あっちが課長になって自分はなぜ平社員なのだろうかとか、あそこの人はすごく儲けているのにうちの店はうまくいかないとか、社会的な地位や評価にこだわる。特に男性の場合、肩書にこだわりますが、そういう社会的な評価から自由になるということです。ですから、高齢になれば、いろいろな社会的な制約から自由になれます。

何かの拘束から逃れる自由だけかというと、そうではなく、ポジティブなものもある。それが、本当に自分がやりたかったことができるという自由です。それからもう一つ、彼女が挙げたことで大変にいい言葉だと思うのは、公共のために働く自由ということです。義務ではなく、自分から自発的に選んでいくということです。ですから、高齢になれば、いろいろな意味で可能性が出てくるのではないかと思います。現役の頃はできなかったことができるようになる。そういう意味で、高齢社会は決して暗くはないと思うのです。

高齢社会というとどうしても、高齢者が増える、寝たきりが増える、認知症が増える…と厚生労働省あたりがそういうイメージを作り出して、予算がどんどん増えて、いろいろな事業も増えてきているのですが、私はあれは一種のマッチポンプではないかと思うのです。実際に今、高齢者はかなりお元気です。65歳以上で要介護の人は1割もいないと思います。8割はお元気ですし、虚弱なお年寄りを入れて

も、9割はお元気だと思うのです。ところが、世の中には厚生労働省やマスコミなどがいろいろな情報を流すので、高齢者について間違ったイメージがあるのです。

私はお茶の水女子大学で老年学という授業を教え ていますが、授業の最初に「65歳以上のお年寄りの うち、認知症の人はどのぐらいいると思う? | と学 生に聞くと、普通は2~3割という答えです。ひどい 人は5割、2人に1人と言うのです。実際には1割も いません。だいたい5~6%なのです。けれども、あ れだけ認知症ということが言われて、テレビドラマ で、徘徊したり変なものを食べてしまったり、家中 をぐちゃぐちゃにしてしまったりというお年寄りが 登場するので、若い人たちが非常に偏ったイメージ を持ってしまう。2人に1人と言う学生に「じゃあ、 あなたのおばあちゃんは寝たきり? あなたのおば あちゃん、ぼけてる?」と言うと、「いいえ、元気で 一人で暮らしています」と言う。「じゃあ、どうし て? | と言うと、自分のおばあちゃんが例外で、世 の中一般はみんな認知症になって、あちこち徘徊し ているというイメージを持っているのです。ですか ら、若い人のイメージを変えていくにはどうしたら いいのかと思います。

今、子どもたちや若い人と、高齢者との接触のチャンスが非常に少ないのです。富山は比較的、三世代同居の世帯が多いですが、日本全体では核家族が多く、三世代家族はすごく少ない。80年代ぐらいまでは、たぶん65歳以上の方の半分以上が三世代家族で暮らしていたと思うのですが、今はどんどん減ってきて4分の1にも満たなくなっています。一緒に住まないだけではなくて、交流の機会も非常に少ないのです。

老年学の授業などでお年寄りの聞き書きをしていらっしゃいと言うと、だいたい自分のおじいちゃん、おばあちゃん、ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんにインタビューするのですが、すでに亡くなっている人もたまにはいるし、それから遠方に住んでいてインタビューできないという学生もいる。そういう学生に「誰でもいいのよ。近所のお年寄りでもいいのよ」と言うと、「お年寄りはいません」と言う。「そんなことはないでしょう」と言うのだけれど、そう言うのです。女子学生にそういう宿題を出すと、

身近にいなければ老人クラブや老人会に行って聞いてくるとか、ご近所の方に聞いてくるとか、「幸いにしてお友達の○○さんには両方のおばあちゃんがいたので、一人分けてもらいました」と見つけてくるのですが、男子学生はだめです。そういう意欲がないというか、考えていないのです。「いません」と言うので、「そんなことはないでしょう。いるはずです」と言ったら、リタイアして守衛さんをしているおじいさんを見つけてきたり、中学校の恩師を見つけてきたりしました。だから「いたでしょう」と言ったのですが、頭の中に高齢者がないのです。

どういう形で世代間交流するか、あるいは、若い 人に高齢者の間違ったイメージではなくて、ちゃん としたイメージを伝えていくか、これはとても重要 なことだと思っています。今、石川さんの言われた 聞き書きも一つだと思うし、私が学生に出している 課題がまさにそういうことです。若者がお年寄りの 話を聞くことによって、お年寄りはこうなんだとい うことに目覚めるわけです。とても面白いのは、お じいちゃんの話は戦争の話が多いのですが、おばあ ちゃんの場合は初恋の話や結婚のいきさつの話が多 くて、レポートを読んでびっくりしたのですが、「お ばあちゃんだって恋愛するんだ | と書いている学生 がいました(笑)。「おばあちゃんって、昔からおば あちゃんじゃなかったのよ」と言うのですが、そう いうことで、とても新しい発見があるのです。です から、何かうまい機会を作って、世代間の交流の場 を作っていくことが必要です。これは行政がやるの か、学校がやるのか、地域がやるのか、いろいろあ ると思います。そういうことによって間違ったイメ ージを壊していくことが今必要ではないかと思って います。

#### 濱口晴彦

早稲田大学 名誉教授、創造学園大学 教授



皆さんのお話になっていることの中から問題点を私なりに整理してみると、三つあったように思います。一つは、どうしたらたくましく生きられるのだろうかということ、一つは世代間の交流ということ。もう一つは、高齢社会をどのように考えておけばいいのかということ。これらについて、今考えていることを述べてみたいと思います。

一つは、たくましく生きるという話で、これは石川さんのお話の中にまつを媼の話があって、90歳にして発心して、そしてもう一度生き直すというのは、これはなかなか本当はエネルギーの要ることです。自分の年齢を考えてみても、今までの延長線であればある程度できるのですが、もう一度新しく生き直すことをやってのけるようなたくましさがあるというのは、一体背後に何があるのだろうかと思います。

白河藩の藩主だった松平定信は、老人の日を月に一回設けて、老人たちにお城へ来てもらって話を聞いたそうです。来ることのできない人にはかごを差し向けて、かごに乗って来てもらって話を聞いた。これはエピソードであるのか、真実であるかどうか分かりませんが、語り継がれていることによると、突然、殿様から召しだされて、普通の人たちが話をするといっても、なかなか口が動かない。「一体何を私たちに聞きたいのですか」と言うと、「あなたたちの宝をもらいたい」、「その宝というのは何ですか」

と言うと、「あなたたちの眉間のしわの中に隠れている知恵をいただきたい」と言ったというのです。老人が持っている知恵には、何らかのたくましさがあって、彼らがそこに至ったことを聞き取ろうとしたわけで、それを石川さんが現代の松平定信たらんとして、されていらっしゃるのだろうと思うのです。

このたくましさを考えてみると、このまつを媼に しても、「自立」ということが一方にあり、同時にも っと内面の問題として見ると、「自律」がある。この 自立と自律をはかりにかけながら、その人は自分の 最後の人生を選択して、日記を浄書する、そして日 記をまとめて出版することが可能であったのだろう と思うのです。ただ、自ら立つだけではなくして、 自分の人生を自分で何とか始末をつけようという自 律がなければ、そういうことはなかなかできなかっ ただろうと思うのです。今の石川さんのお話を伺っ て、このまつを媼の生きざまの中にあるのは、そう いう自立と自律のバランスであり、絶えず何かを選 択しているはずだと思うのです。「今日は疲れたか ら、もう寝る」「いや、もうひと踏ん張りして、もう 1ページ浄書して とかいう選択をしながら、自立 と自律のバランスを取っている。90歳でその肉体的 なエネルギーはすごいと思います。それを石川さん が聞き書きしながら、本におまとめになる。それが 後世に残っていくということは、まさに世代間の交 流の生きた実例だろうと思うのです。

もう一つの、世代間の交流については、早稲田大学の近辺に早稲田商店街があります。この早稲田商店街の人たちは、もともと福島県の金山町との物産の交流や人の出入りなど、さまざまな交流をやっており、もうかれこれ20年続いているのではないでしょうか。大学のキャンパスを利用しながら、物産展などを積極的にやっております。そこが今年8月にNPOを立ち上げました。そのNPOの名前たるや、ものすごい名前で「NPOノブレス・オブリージュ」。その創立総会があって、それに私も呼ばれて傍聴したのですが、最後にその一コマの若者たちとの交流の中に、非常に興味深い発言が一つありました。

たぶん20歳代の学生が、「私たちはちょうどスライスされるように薄い切片で、20、21、22と薄く区切られた世代内の交流しかない。だから高齢者たちが一体何を考えているのか分からないから、ぜひ私

たちは交流させてもらいたい」と言ったのです。「交流したい」ではなくて「交流させてもらいたい」と。確かに、昔々の話であるとか、生きてきた貴重な歴史を共有するためには、そういう交流抜きには考えられないと思うのです。したがって、高齢者が積極的にそういう人たちを、世代間交流の中にどうするとができるのかという手がかりが必要ではないでしょうか。これは奥野さんの交流の話で考えてみると、お話の中に出てくる人たちと、若い人たち、異世代の人たちとの交流なしには、そういう非常にりっぱな文化的なもの、あるいは民俗的なものも、後世に伝えることはなかなか難しいと思うのです。それをどのようにやっていくのかというところが、お話の中のもう一つの問題提起であったような気がするのです。

もう一つの問題、高齢社会をどう考えるかについ ては、私自身は高齢社会をもう少し広く考えていま す。つまり、高齢社会というのは「高齢者の社会」 ではないのです。0~14歳までの世代と、15~65歳 までの世代と、65歳以上の世代という、学術的に見 ると意味のある区分の中で、社会全体に65歳以上が 多い。このバランスを含んだ人口構成の社会を、高 齢社会と考えたほうがいいと私は思うのです。そう すると、高齢社会は自ずから普通の社会のはずなの です。ただ、人口の構成比のバランスがあるわけで、 では高齢化社会あるいは高齢社会以前の社会を何と 呼んでいたかというと、人々は「社会」と言ってい たわけだから、本当は社会なのです。それを、ある 点で社会がどういう特徴を持っているかと考えて、 それを「高齢社会」と呼んだときに、その社会の特 徴が浮かび上がってくるというように、高齢社会を 考えたほうがいいのではないだろうか。

今のことについて、どういう問題の提起のしかたをすることができるかというと、人間の歴史の中で、これまで必ずそれらのことを除いて人間の社会は存続しなかったといういくつかの事柄があります。一つは、食べ物を栽培し、生産し、加工するということをやらなかった社会はないはずです。次に第2には、道具を作って物を加工するという、物を作ることをしなかった社会も存続しなかったはずです。それから第3には、秩序を守り、秩序を安定させる、あるいは安心な社会をつくること抜きの社会もやは

り考えられないのです。第4に、子どもを生み、子 どもを育てることをやらなかった社会もないはずで す。最後に第5として、それからもう一つは、人々 が移動して同時に情報を伝達しあう。その伝達が今 のようにITを使うのか、あるいはのろしを上げて伝 達し合うのかは別として、人々が移動し情報を伝達 すること抜きの社会はなかったはずです。

今私が5つの項目で申し上げたことを考えてみると、必ず老若が共同してやっていました。そのバランスが、老人が多かったのか、子どもが多かったのかは別として、必ず共同している。そうすると、その必ずやってきた社会を、特に私たちが今、高齢社会あるいは高齢化社会と呼んでいるのは、それなりのある種の特徴を持っているからで、その特徴にニックネームをつけたものだったわけです。今から50年前の社会は、高齢社会と言わずに社会と言っていたはずですが、その社会にだって高齢者はいたのです

エピソードを言うと、明治政府が統計で「高齢者」という言葉を使いましたが、そのときは100歳以上の人のことを高齢者と言ったのです。百数十年前の話ですから、100歳以上の人がいたにしても統計的に必要な数がいない。しばらくして「高齢者」という言葉は使わなくなった。「高齢者」という言葉は必要なかったのです。

けれども、今日私たちは、高齢者には100歳以上の人も含むけれども、もっと違った扱い方をしていますね。そうすると、社会が持っているある特質を言うためにあえて「高齢社会」と言うと考えたほうが、問題点がもっとクリアになると思うのです。高齢社会になったから世代間交流が必要なのではなくて、高齢社会と呼んでいる社会の持っている問題点の一つが、世代間の交流なのです。

世代間交流をどうするかということで、実は私は「老若共同参画社会基本法」という法律を提案しています。そういう法律を基本法として、それに必要な付帯する法律も制定していくという考え方を持っています。私自身が高齢社会をどのように考えているのかというと、狭義の高齢社会という考え方ではなく、むしろ広く取って、その中でその社会が持っている世代間交流などの問題を考えていくと、その問題がどういう広がりを持っているかということに

なるのではないかと考えています。

ありがとうございました。ご議論の方向 もだいぶ固まってきているように思います。 ここでちょっと休憩を取り、またそれぞれに談論風 発していただければ、誠にありがたいと思います。

#### 意見交換

柚 井 会をよくする女性の会」で、樋口恵子さんが理事長で、私が副理事長ですが、女性と高齢化の問題をちょっとお話ししたいと思います。

実は今、男性のほうが元気がないのではないかと、私たちはいつも言っています。「高齢社会をよくする女性の会」はすごいパワーがあるのです。毎年、各地で大会をやっていて、今年は鳥取の倉吉で開催しました。人口5万ぐらいのところで約2,000人を集めて、去年が広島で2,500人ぐらい。

先ほど奥野さんから、男性がコーディネーターに なるべきという話がありましたが、私は男の人がも う少し元気にならないといけないのではないかと思 っています。私どもは女性運動をしているので、女 の権利とか女性の権利拡張と言っているのですが、 本当のことを言うと、男の人のほうが大変ではない かと思うのです。例えば65歳以上で配偶者と死別し た場合、男性は3年以内に亡くなるのですが、女性 は約11年生きるのです。どうしてかというと、本質 的に女性のほうが強いとかいろいろあるのですが、 生活習慣の問題があるのです。中村丁次さんという 栄養学の専門の方が『女はなぜ男より長生きなのか 一臨床栄養学が教える食習慣女性化10か条』という 本を書かれて、その講演を聞いたのですが、女性は なぜ長生きなのかを、彼は食生活の面から説明して いました。女の人は多品種食べる、おしゃべりしな がら食べる、そして自分で料理をする。男の人はあ まりやらないということで、男の人が亡くなる確率 が高いということです。

それから、私は以前、東京都老人総合研究所にいたのですが、そこの同僚で河合千恵子さんという方がずっと配偶者との死別の問題を研究しています。その調査で非常に興味深かったのは、東京都の45歳以上の中高年の男女で、配偶者と死別して3年以内の方を調査したところ、死別して困ったことを挙げるのはだいたい男性のほうが多いのです。男性は、寂しくなったとか、話し相手・相談相手がいなくなったとか、日常の生活管理に困ったとか、食事に困ったとか、困ったことがたくさん出てくる。女のほうは、ほとんど困っていることはないのです。せいぜい、不用心になったとか、重い物が運べないぐらい。団塊の世代以降は変わるかもしれませんが、今の高齢の夫婦はあまりハッピーではないですね。

私も高齢者のインタビューなどをしているのです が、高齢の女性に「いつが幸せですか」と聞くと、 「今がいちばん幸せ」と。「どうしてですか」「夫がい ないので」(笑)。中には、本当にメリー・ウィドー みたいな方がいまして、一流企業の管理職だった夫 が在職中に亡くなった。すごくりっぱな家に住んで いらっしゃって、一年のうちに何回も海外旅行をし ているのです。インタビューに行くと「あなたたち はかわいそうね、ご主人がいて。私なんかはとって も自由よ」と言うのです。私たちは「夫がいちばん いい地位で在職中に死んでもらうしのが一番という 結論になりました (笑)。 定年退職になると手遅れで すが、在職中だと会社からいろいろもらえる。景気 のいい頃の話で、今はそんなにいただけないでしょ うけれど。お葬式も全部会社がやってくれて、とい うことで、本当にびっくりしました。もっと印象的 だったのは、これはまだ高齢になっていない、中高 年ぐらいの女性でしたが、離婚を考えていらっしゃ った。そうしたら、ご主人が海水浴か何かに行って 事故死してしまったのです。離婚していたらお金が 入らなかったのですが、事故死で莫大な保険金が入 ったらしいのです。今、娘さんと二人で、すごくハ ッピーだと。インタビューしているうちに何回も「幸 いにして主人が亡くなりまして」と(笑)。本当に日 本の男性、特にサラリーマンの方はとてもかわいそ うだなと思います。

ですから、濱口先生から老若共同という話がありましたが、男女共同参画も必要で、老若男女共同参

画でなければいけないと思うのです。確かに社会的・経済的には女性はあまり恵まれていないように見えるのですが、実際には男性の老後が問題ではないかと思います。団塊の世代が来年から定年になりますが、ちゃんとした受け皿を作らないといけない。地域に帰るとか、そば打ちをするとか、農業をするとか…でも毎日そばを打っているわけにはいかない。だから、夫と妻の間のコミュニケーションをうまく成り立たせる必要があります。

もう一つの例を申しますと、私が大学の寮で一緒だった人なのですが、旦那さんがロマンの持ち主で、早期退職して、田舎暮らしをやって、ラベンダーやブルーベリーを作っているのです。「奥さんはどうしているの?」と言ったら、「とんでもない、私は嫌よ」と。旦那さんが一人でやっているのですが、そのロマンや夢がいつまで続くかなと思ったのです。団塊の世代の定年の夢も、夫婦で実現するようにしないといけないし、そのためのコミュニケーションを作っておかないと、悲惨なことになるのではないか。その辺を、奥野さんにもご意見をお伺いしたいと思います。

奥野 田舎暮らしで失敗するという今のお話は、 よく分かります。団塊の世代でいちばん困 るのは、勉強していないことなのです。

若いときは高度成長期で、先輩が何でも教えてく れるし、特に営業関係の人たちは交際費で飲み食い して、毎晩バラ色の人生を送っていました。勉強を しなくても成果が上がったのです。その原体験があ るので、不景気になった途端に右往左往して自殺率 が最高になるのもその反動だと思いますし、いちば ん怖いのは情報に疎いことです。結局、誰も相手に してくれないので、田舎暮らしでもしようかという ことになるのですが、そうは問屋が卸さない。「帰農 塾」などいろいろお世話はしているのですが、なか なか戦力になりません (笑)。そういう予備知識もな いし、もし本気でやるのだったら、30代、20代から やっていないと、農作業はそんな簡単なものではあ りません。奥さんも相手にしてくれないからと、仲 間を求めて山村へ行っても、村には村社会のルール があります。では、いないかといったら、利賀村と か八尾とかいろいろなところに、都会から夫婦でや

って来た人たちが結構います。この人たちは、自分 のポリシーをしっかり持っています。陶芸やガラス 工芸などをやっている若い夫婦は、こういう環境で の創作活動が最高にいい、この風が何とも制作には 素晴らしいと言います。商売は、大都会の一流百貨 店で、何万円もする自分のガラス作品を売っていて、 それで十分やっています。あるいは編集の仕事をや っていた人たちが夫婦で八尾に帰ってきたのですが、 田舎暮らしをしながら、ほとんど自宅のパソコンで 東京の編集の仕事をやっています。そういうタイプ の人は、生き生きしています。ですから、田舎暮ら しをやるときには、それ相応の準備がないとだめな のですが、一般的に団塊の世代について私がいちば ん心配するのは、情報にあまりにも疎いこと、勉強 していないこと、自分に投資していないことで、こ れは男も女も一緒です。これまで自分に投資しなく てもやってこられた不幸があるのです。

周りを見ますと、定年になってOB会などに集まってきても、最初は毎日ゴルフに行っているとか、囲碁をやっているとか、そういう趣味の世界の自慢話ばかりなのです。あとは孫の話などで、会話が続かない。それで誰も相手にしてくれなくなってくるのです。これは都会でも地方でも大変怖いことだと思うので、冒頭に申しました自分の役割みたいなものをしっかり見つめないと、田舎暮らしはバラ色ではないと私は思っています。

ちなみにグリーンツーリズムとやまのメンバーは、 私はずっとデザインや広告、コミュニケーションの 現場の仕事でしたし、事務局長もコンピュータとデ ザインの仕事をやっていて、事務処理をやっていま す。それから聞き書きなどを全部やってくれたメン バーは60歳の女性ですが、フリーのコピーライター です。もう一人の仲間は、コマーシャル撮影をやっ ていたカメラマンです。あとは県庁OBと市町村の OBの人たちが何名かいます。都会向けの企業など で仕事をしていた人たちが、実はこのグリーンツー リズムの中心になって仕事をしているのです。つま り、山村や漁村を都市と同等に見ることができ、山 村に必要なデザインもあれば、山村のじいちゃんか ら学ぶような世界もあることに気がついた、アンテ ナが高く、センスのいい人たちが集まってきて手弁 当でやっています。

そういう現象を見ていますと、私個人の場合もそうですが、今非常にありがたいと思っているのは、定年になって美術館の館長で非常勤になりますと、年金はもらえるわ、若干の手当はもらえるわで、それを全部情報などに再投資できるのです。定年になってから、ほんの少し角度を変えたら、刺激的な世界が待っているというのが私の個人的な実感です。ですから、現在は私の場合はバラ色ですが、これだけではもったいないから、仲間に呼びかけているところです。インターネットのブログやタウン誌、あるいは月刊誌、地元のマスメディアなど、いろいろなメディアで世代間交流のきっかけを作る仕事を続けています。

田舎暮らしはそんな甘いものではない。その原因は、団塊の世代の育った時代背景が大きいのではないかという気がします。

奥野さんのように、たくさんの刺激を自 ら与えていくような人は別として、「男性は 変わりなさい、もう少し元気を出しなさい」と言わ れても、「はい」と言えない側面もたくさんありま す。

そこで私が提案したいのは、短期的な速効性のあ る特効薬はなくても、長期的に見るといいのではな いかというものです。一つは、学校教育の中で少子 高齢化はもう避けて通ることのできない大きなテー マです。教科書の中に少子高齢化に関する記述がど のぐらい入っているか分かりませんが、それに相応 する副読本を作って、小中学校などできちっと学ん でいく。全国的にというとなかなかできないけれど、 富山県なら富山県の単位でもできるような副読本を 作って、その中で男は変わっていく必要があるのだ というメッセージを織り込むのです。今の中学生や 小学生が大人になったときというように、教育は10 年とか100年の単位でものを考えないといけないと ころがあります。そういうもっと体系的な副読本を 作って、提供することが必要ではないかと思うので す。

もう一つの提案は、メンター、つまり師表、先達、 手本になるような人、例えば奥野さんのお話の中に 出てくるような人から何かを学ぶ、という感性で、 メンターに関する作文を募集する。これは世代間交 流の一つの手がかりです。自分がこういう人になりたいなと思うような人がいると、目標になるし、具体的に理念・理想を持つことができます。それが名前のある人であっても、そうでなくても、「私はこういう人になりたい」というメンターに関する作文を募集して毎年出していくこともいいのではないかと思います。

これは昨年の河北新報で読んだ記事ですが、東洋大学の研究者が調査した結果によれば、日本の若者たちに「自分の父母を尊敬しますか」と聞くと、恐ろしいことに、父親を尊敬するというのは36%で、母親を尊敬するというのは46%ぐらいです。その調査を、同時にアメリカとトルコでやっているのですが、自分の父親を尊敬するというのは、みんな90%です。身近にいる父親や母親をメンターにすることができないとなると、例えばノーベル賞の田中耕一さんをメンターにするとか、いろいろそういうメンターはいるのです。

メンターを自分が生きる際の理由づけ、動機づけにする。苦しいときも越えることができるのは自分がメンターとする人がいるからだと。石川さんのお話は、まさにそうではないですか。メンターであるから、一生懸命ひたすら聞き書きもできるのだろうと思うのです。福井県では「日本一短い手紙」などをやっていますが、メンターに関する作文を富山県が率先して募集すれば、いいメンターのメッセージを県内県外に発信し、伝えることができるのではないでしょうか。

今ほどの話ではないですが、『万華鏡』でこのおじいちゃんを特集したら、すぐ電話がかかってきて、お金を払うから100冊くれと言うのです。親戚から何からに全部配りたいと。自分が主役になって、しかも縄文以来の何千年の技術をきちんと保持して貢献していることについて、ものすごく喜ばれたのです。ちょっといいことをしたかなという気がして、記録をすること、聞き書きはそんなに効果があるものかと思いました。

男の人に聞き書きするのは大変です。特に高等教育を受けたおじいちゃんたちに至っては、とても大変です。

例えば『名生家三代、米作りの技と心』という米 作りの本を書いたとき、このお父さんはそのときに 65歳ぐらいで、高等学校を出て農業をやってきた人 だったのですが、聞き書きできるようになるまで1 年半ぐらいかかりました。なぜかというと、農業書 のようなりっぱなお話しかしてくださらないのです。 私は素人ながら、農業がうまくいっていないのは分 かっているけれども、私が分からないと思って、自 慢話をいっぱいされて、そのうえ農業概論のような 話ときているから、とても聞いていられない。それ を書く気には全然なれないのです。

そのうち、奥さんのほうの聞き書きが先にできてしまったのです。時間をずらして、同時に進めていたのですが、お父さんのほうは1年半かかっても全然進まない。私は決して「そういう話ではだめです」とは言いません。何しろ、話していただかなければいけないのですから。でもこのお父さんは、どうして進まないのだろうということに、どこかで気がついてくれたのだと思います。あるとき、農業をしていた自分の父親の悪口をぶちまけた。そのときから、やっと地面に足を下ろしてくれて、田んぼの中に入ってくれたのです。そうしたら、自分の体験が自分の言葉で噴き出るように出てきた。そうなると、あとはそんなに時間がかからないのですが、男の人は本当に大変です(笑)。

神井 そうですね。私も学生に聞き書きレポートを出させる前に、なるべくおばあちゃんのほうがいいと言っています。おじいさんは、本当に話が面白くない。自分がいかに勉強ができたか、いかに出世したか、いかに仕事をしたかという自慢話ばかり。いちばん面白くないのは、学校の先生(笑)。校長先生などになった人も、全然つまらないです。寝食を忘れて子どものために尽くしたとか、そういう話ばかり。

奥野 自然と向き合っている人の話は、本当に 楽しい話が多いですね。やはり人間を育て るのは、自然ではないかという気がします。

この、嵐龍夫さんの話などは、一冊にし たいぐらい。もったいないですよね。 本当にもったいないです。インタビューをしている人も60歳の女性で、商業コマーシャルやコピーライターをやっていたのですが、もう転向してしまって、こういう聞き書き専門で100号以上書き続けています。

袖 井 一人でやっているのですか。

奥野 全部一人です。中身はもちろん原稿依頼 していますが、最後の聞き書きはいつもい ちばん評判がいい。

樹皮で何かを作るというのは、仕事とし ての名前はないのですか。

奥野 それはありませんね。つまり、みんな自分で作っていたので、プロの職業ではないです。それは縄文以来ずっとそうです。

神 井 こういうものを展示しても、人は見に来 ないのですか。

展示するプロがきちんと面倒を見ないと、補助金で施設を造って、それで品物を集めておしまいで、人は見に来ません。だから、年配の人のことも分かり、子どもたちや若い人たちのことも分かる50~60歳のベテランのプロがきちんと面倒を見れば、生きた施設になるのです。しかし、行政、特に小さな自治体は、これまでそういう専門家を育てていませんね。市町村合併で、一層必要になってくると思うのですが、もったいないです。

あそこは本当に先進地です。老人がいち ばん生き生きしている。

神 井 そうですよね。お年寄りがいろいろなこ とを、観光化してやっていますね。 先ほど濱口さんがおっしゃっていましたが、やはり50~60代にかけての、これからの特に男性の生き方です。女性の場合は、羽が生えたように伸び伸びしています。私の妻も今年、定年を迎えたので、前より忙しいのです。男は、どうもいい話を聞かない。

私はマスコミにいましたが、マスコミの世界では、 だいたい50代、定年を迎える前後で、数十%の人が 亡くなっています。不摂生とストレスが原因です。 本当に昔気質のジャーナリストで育ってきた人たち は短命です。

羽田澄子さんのお作りになった映画『痴呆性老人の世界』の中で、私がいちばん印象に残るところは、女の人は認知症になっても、こうしたら、ああしたらと世話焼きをする。男はぶすっとしている。作為的にやった映像ではなくて、男を写すとぽつんといるのに、女の人はぼけたってたくさんの人と交わっているのです。これが袖井先生の言った、男たちがたどってきた従来の生き方の結末だろうと思います。

けれども、例えば相撲取りは、かつてはインタビューされると、何を聞いても「ああ」とか「うん」しか言わなかったのに、今ではみんな能弁でよく語るようになった。男だって、変わる可能性は十分あるのです。ただ、そのためには何か手続きを経ないとだめで、その手続きとして、いろいろな仕掛けをやっていかないといけない。私はその手がかりの1つとして「シニア・スタート」というプログラムを提案しています。シニアが退職する際、その企業や団体からいくらかの財政支援をいただき、帰ってくる地元の自治体が会場とか支援システムを提供し、シニア社会学会のようなところが必要な人材を含めノウハウを提案するという構想です。

女の人も、本気になって男と対等に職場の中に入る人が増えたらどうでしょう。やはり男とは違いますかね。

女の人の場合、割におしゃべりが好きと 神 井 いうのがあって、グループをどんどん作っ ていくのです。男の人というのは、何か肩書に左右 されてしまうことがあって、その辺がかなり難しい。

今、私はシニア社会学会と、高齢社会をよくする 女性の会と2つやっているのですが、すごく対照的 です。高齢社会をよくする女性の会はほとんど女な のですが、あまりプライベートなことを言わないで つきあって、本当に平場です。だから、私にも「先 生」とは言わないで、みんな「さん」づけですし、 あまり旦那が偉い人とか、そういうことは全然知ら ないから、だいぶ後になってから「あの人の旦那さ んって○○の重役よ | 「知らなかった | ということも あります。ところが、シニア社会学会のほうは、す ぐ東大卒とか京大卒とか言う。そこがとても不思議 なのです。女性の会のほうは、20年ぐらいつきあっ ていても、この人の旦那さんが何をしているかとか、 大学はどこを出ているかなんて、全く興味もないし 聞きもしないのですが、男の人は必ず大学とか元勤 めていた会社とか言うのです。

私どものNPOの副理事長をやっている方は県庁OBで、もう65歳です。朝日町に自分の持ち山があったのでそこに小屋を建てて、一人でじーっと瞑想にふけるようなことを夢みていたのが、そのうちに友達を呼んで飲んだりしているうちに、村の人たちがみんな遊びに来る。そのうちに炭焼きをやるわで、だんだん増えていって、今度は子どもを連れてきて、今は子どもの体験学習のメッカになっているのです。プログラムを組んで、毎日のように何かをやっています。最初の動機は不純で、一人になりたくて、こもろうと思って行ったのが、ちょっと方向が変わってしまって、今や有名人です。男もその気になれば、ちょっとしたきっかけで、そういうことが起きるのだなということです。

でも、奥野さんの同期の方で、そういう 抽 井 転身をなさった方は少ないのではないです か。定年後、電通のような会社の方は、皆さんどう いう第二の人生を送っていらっしゃるのですか。

世内報などを見ていますと、写真を撮りはじめるとか、海外旅行、囲碁の会、ゴルフコンペ、詩とかいろいろなことをやったり、美術系から来た人は絵を描きはじめたり。ただ、絵を描いて売ろうとしても、生活がかかっていないから迫

力のない作品ばかりで、誰も買ってくれない(笑)。だいたい、そうやって時間をつぶしているのがほとんどです。ただ最近は、大学や専門学校の講師が非常に増えてきました。現場の生のビジネスの世界で体を張って生きてきた人たちですから、講師に向いている人がいる。日頃そういう自己研鑽をしていないとだめですが、社会学科とかマスコミ学科、情報学科といったところの講師になって、これを自分の心のよりどころにしている人が増えています。

神 井 ゴルフとか囲碁とかは、そんな毎日やれるものですか。

そのうちだんだん相手がいなくなる。仕事で、あの人とつきあわないと商売に差し障りがあるとか、人間関係の損得がどこかにあるのではないですか。そういう人間関係がなくなってしまうと、だんだん遊んでくれる相手が少なくなる傾向になります。

話は変わりますが、せっかくの機会ですから、もう一人、変わっていった人を紹介します。棟方志功が福光に疎開していたとき、棟方志功自身は生活のためにあちこちに画会を開くため旅をしていて、こちらにほとんどいませんでした。ですから、母子家庭のようで、チヤ夫人は子ども4人を抱えて、まるっきり親戚も知り合いもいないところで大変だったのです。

棟方志功の次女の小泉ちよゑさんという人は、少女時代を富山県で過ごしたので、富山が自分のふるさとだと思っていて、同級生も多いのです。ところが、お嫁に行って、不幸なことにご主人の会社が倒産し、そのご主人も亡くなり、非常に苦労して生活してこられて、3~4年前に呼んでお会いしたときは、天下の棟方志功の娘にしては、失礼ながらしょぼくれた普通のおばあちゃんでした。「私はこのまま静かに消えていくのよ」なんて、寂しそうに言っていたのですが、絵手紙のサークルで会長になってしまったのです。

たまたま南砺市の保育園の保育士から、棟方志功が、小さな小川をテーマにした「瞞着川」という物語の名作を残しているから、あれを紙芝居にして子どもたちに伝えたいという発案があったのですが、

それだったらと、実際に少女時代をそこで過ごした ちよゑさんに絵を描いてもらったのです。私の妻が 文章を書けるので、物語を作りました。棟方志功が 小川のカッパの伝説を面白おかしく作った本当に素 晴らしい作品で、それに手を入れるわけにはいきま せんから、そこでタイトルが「ちよゑちゃんとパパ とだまし川」。娘から父親を見た物語について、絵を 17枚ぐらい描いてもらったのです。屋根裏部屋で自 分は詩を書く。下ではパパが一生懸命に版画を彫っ ている。そういう小さな家の中での暮らしの一コマ とか、川の物語とか、カッパも実際に出てきたとか、 戦後の普通の家庭の、貧しかったけれど小さな家で 6人家族が肩寄せあって仲良くやっていたというの を、もうちょっとふくらませた話です。

地元の保育園で、年長組だけ20人ぐらい集めて、 それと父母の会の人たち、地元のおじいちゃん、お ばあちゃんにも来てもらって、50~60人ぐらいにな ったでしょうか。そこで、この実演をやり、実際に ちよゑさんに立ち会ってもらいました。子どもたち は、自分のところの川からカッパが飛び出してくる のに喜んだり、版画家の棟方志功という名前を覚え て喜んだりしていたのですが、それ以上に涙を流し て喜んだのは、おじいちゃん、おばあちゃんでした。 自分の孫と一緒に、紙芝居を楽しんだのです。

今度はそれをたくさん作って、図書館や各保育園に配ることになったのですが、最近聞きましたら、紙芝居が老人会でとても人気があって、またこれをやってくれといくつも依頼が来ているのです。これは60年前のふるさとにあった物語を、今風に子どもたち向けにアレンジした話なのですが、出てくる風景は、自分たちの子どもの頃の風景です。そういったことが、期せずして世代間交流になりました。

そうしたら、ちよゑさんが、この1~2年ですっかり元気になって、講演会をしたら800人ぐらいの超満員になったのです。顔はつやつやして、目は生き生きとして、自分の父親、家庭はこうだった、昔は富山もこういう風景があった、素晴らしかったということを、どんどん発言してもらえるようになりました。これは、ベテランの50代ぐらいの保母さんたちが応援してくれてできたことです。やはり50~60代の人たちには、そういう役割があってもいいのではないかという気がします。

本当によき時代のロマンを今風に再現して、子どもたちに伝える。子どもたちにちよゑさんを紹介したら、「おばあちゃん、カッパっていると思うかい?」「いや、いない」とか、「あなたの心の中にいるのよ」「ふーん」なんて会話をしている。あの会話を見ていたら、涙が出るぐらいうれしかったです。こういう紙芝居というメディアを一つ発見できただけでもいいなと思います。

袖 井 その方は、ずっと絵を描いていらっしゃ ったのですか。

ええ。自分では油絵を描いていたから、 といはもちろんあるわけです。しかも、自 分の少女時代のふるさとですから、絵に描くには合っていて、一気に徹夜して描いてくれた。勢いがあるのです。そういう生きる場みたいなものを提供して、ちょっとよかったかなと。しかし、そこに出てくる、柳の木があって、ナマズが泳いでいて、ネムノキの花がいっぱい咲いている、という風景は、ほ場整備してしまって今はどこにもないのです。ホタルだけはいますけれど。

今のお話を伺っていて思い出したのですが、今の子どもたちに、日本人の原風景を描きなさいというテーマを与えると、多くの子どもたちは、例えば山が幾重にも重なっていて、山のふもとに家があって、前に田畑のようなものがあるという絵を描くらしいです。実際は、たくさんビルが建っているような環境の中で生活している。富山だけでなく、至るところの都市部町村部には、ビルが建っています。けれども、原風景を描きなさい、日本的なものを描いてごらんなさいと言うと、そういうものを描くというのです。

ですから今のお話で、紙芝居に年齢を超え世代を 超えて人々が結びつくその要素は、潜在的には必ず 何らかの形で頭の中に刷り込みがあるのでしょう。 それをどうやって引き出すのかは、私たちが考えな ければいけないことだろうと思います。紙芝居なの か、歌なのか、あるいは別なことなのか、それはそ のときの使える手段によって違うのだろうけれど、 そういうものを引き出す努力を、これからもっと積 極的に、あるいは知恵を絞ってやる必要があると思 います。

私が今行っている創造学園大学の学園長は数学者 の広中平祐先生で、その人が「創才」ということを 絶えず言っています。「創才」というのは創造する才 能で、天才・秀才でなくても、誰でも持っている。 その創才を、どのような形で私たちが学校教育なら 学校教育の中で引き出すことができるのか。それを 私が受けて、むしろ「創才」は一度に引き出しそれ を発揮できないから、例えば教師として学生と向か いあったときにできるのは、まず「発才」です。教 室の中でいろいろなことをやりながら、才能を見い だすのが「発才」で、それを発展させるのが「展 才 |、その結果「創才 | に至るというのが、私の今考 えているところなのです。そうすると、今奥野さん がおっしゃった、紙芝居というメディアを使うとい うことも、人々を結びつける際の一つの創才のやり 方ではないのか。私たちがそういう創才をどこかで 工夫すれば、世代間の交流も可能になるのではない でしょうか。

今、日本社会が直面している大きな問題の一つは、 世代間がどのような形で価値を共有し得るかという ことだと思います。その際に高齢者は、絶えず若者 に手を差し伸べて仲良くしましょうというだけでは なくて、あえて壁になり問題点をクリアにする立場 をとることによって、考えるきっかけを作ることも 必要だと思うのです。壁になりながら、同時に相手 の持っている才能をどうやって発見するか、つまり 創才をするか。みんなが天才や秀才であることはあ りえないのだから、その人の持っている潜在的な能 力を発見して、年上の者がそれを引き出す手助けを する。直接手助けをする、あるいは環境を整えるこ とによって手助けをするのが、年上の者の責任では ないか。紙芝居を作ることによって、二つの世代が 結びつくのではないか、お互いに涙を流せるではな いかというのは、大変感動的なシーンではないです かね。

奥野 いちばん喜んでくれたのは、教育委員会 の生涯学習課、児童育成課の人たちで、自 分たちは毎日苦労しているけれども、そういうシーンはなかなか体験できなかった。だからすぐに、た

くさん作って他へもと言って、予算は何とでもする と言っていました。ただ懐かしいだけではだめだし、 今の子どもたちに受けるような作りは、年配の人に は無理ですけれど。

奥野さんのようなタレントがそこに入る ことによって、動くこともあるのではない ですか。そういうキーになる人が要るのですよね。

りまうど私たちの年代が、若い世代と高齢者の世代の両方を理解できるわけです。 しかも、時間もチャンスも体力もあるので、もっとそういう知的な遊びをみんなでやれば、田舎暮らしにしろ何にしろ、いろいろなことができるのではないか。そういう意味では、本当にいい時代だと思います。昔は生活するだけで本当に大変だったのですから、実にぜいたくな時代です。

世代間ということでは、今の実践と同じ ようですが、『さつよ媼 おらの一生、貧乏 と辛抱』を出したときに、このおばあちゃんのいる 集落の人たちがみんな買って読んでくださったよう です。これは宮城県の県北の迫町北方村、今は村で はないのですが、この間まで村だったところです。 そこの舟橋という50戸ぐらいの集落は、だいたい三 世代同居なのです。そこにおばあちゃん、中ばんち ゃん、そしてお嫁さんといるのだけれど、中ばんち ゃんの世代にものすごく喜ばれたというのです。お しゅうとめさんとお嫁さんはどこでもあまりうまく いっていない例が多いのですが、このおばあちゃん を一冊の本で表現したことによって、そこの集落の 人たちがみんな読んでくださって、自分のおしゅう とめさんを見直すようになった。自分のおしゅうと めさんも、さつよおばあちゃんと同じ時代を生きた のだから、同じように苦労したんだなというのがわ かったということのようです。そのうえ中ばんちゃ んたちがさつよおばあちゃんのところに駆け込んで、 「苦労したのね、おばあちゃん」と言って抱きついた り、ぬいぐるみを買ってきておばあちゃんにあげた りしたそうです。

神 井 その中ばんちゃんというのは、何歳ぐら いですか。

中ばんちゃんは、だいたい50代ぐらいから65ぐらいまででしょうか。本当に身近なおばあちゃんなどを聞き書きして出した本は、普段本を買って読むなどということがあまりない人たちでも読んでくださるようです。そういうことがありましたから、聞き書きなども、歴史を伝えていくのにはいいと思うのです。

奥野 ちょうど団塊の世代の、特に男性の場合は企業戦士としてやってきたので、親孝行していません。あまりにも時代が急激に変わったので、親子のギャップが大きいのです。親を軽蔑する傾向が強くて、親孝行をしてこなかったという後ろめたい部分があるし、仕事と称して休みもゴルフに行くとか、夜は遅くまで飲んだくれるとか、子どもとたまに会うと「今度いつ来るの」という状態だから、子育てにも協力していなかった。

ですから、そういう後ろめたさで、団塊の世代は 親孝行と子どもの教育を本気になってやったらいい のではないか。ずいぶん世の中が変わってきて、子 育ての応援にもなるし、年寄りから生活の知恵をも らうとか、人生に学ぶことがたくさんあるような気 がするのです。女性はちゃんとそういうことをやっ ているのですが、男性もむしろこれから反省しなが ら、謙虚に親孝行と子育てをやってもいいのではな いかと思います。そうすると、奥さんの評価も違っ てくるのではないですか。

油井先生の話の、男のみじめさが頭に残っていて、どうやったら改善できるだろうと考えているのだけれども、妻は夫を突き放すのではなくて、もう少し相手の来歴を理解してあげないと、という気がします。「私はこれまで十分夫に尽くしたのだからいいのよ」というのではなく、そういう思いやりが必要ではないかと思います。でないと、男は会社で24時間やってきて、ぱっと地元に戻ってすぐに何ができるか。どこに図書館があるか、市役所があるかも分からない、その人を手助けするような猶予期間があってもいいような気がします。それ

だけの才覚を持った妻が求められるのではないでしょうか。

自殺者で50年代の男性が非常に多いのは、私の仲間でも残念ながら3人ほどいますが、これまで順調だったのが、経済的な環境が変わったら、それを助けてくれる友達が意外といないのです。追い詰められて「うつ」になったときに、相談する相手がいない。そういう意味では、もう少し早く気がついていたらとか、ほんのこれぐらいの金額のことならということが本当に多いのです。心の友達といったものがいちばん少ない世代というか、企業で競り合って生き残ってきた、商売で生き残ってきた人たちが、ずいぶんデリケートなハートを持っているという気がします。

話がまたちょっと違うのですが、「元気な高齢社会」には二通りの意味があると思うのです。社会が元気であるという状態も想像できるし、それから社会をつくっている一人一人の人たちが元気であるという、この二通りのことが考えることができます。すると、その中で元気であるために、どういう条件があると人々は元気であり得るのかということが、まず考えてみるに値するような気がする。そうすると、高齢社会が元気であるための条件が何であるのかも、同時に考えることができるように思うのです。

従来言われていた元気には、三つの要素があると 思います。一つは健康、つまり本人の側から見たと きの健康の問題で、もう一つは暮らし向きというか 経済、最後の一つは人間関係だろうと思うのです。 この三つはそれぞれ大きなくくりですから、その下 位の概念をたどっていくと、健康というのをどう考 えるか。富山県と東京を見ると、寿命は全国的に見 ても大変いいレベルにあります。「日本の統計」とい う、全部で51項目の上位5位まで拾っているのを見 ましたが、寿命はいいほうです。富山県の健康はい いほうだと思うのですが、「自殺」という項目で見る と上位なのです。

県別の自殺の年齢分布は分かりませんが、全国的な統計で見ると、自殺は20代の死亡原因の1位、30代も1位、40代で2位、50代で3位。ただし、女性

だけを取ってみると、上の年代で女性の自殺率が非 常に高くなります。富山県の場合も仮にそれと同じ だとすると、自殺というのは、元気でない社会ある いは人の状態を表すのではないですか。これをどの ようにして、47都道府県の下のほうにもっていくの か。自殺が全くない社会は考えられないのだけれど も、上であることは好ましくないですね。それをど うすればいいのかというと、死因の大きな要素は人 間関係と経済で、この二つの要件をどのように富山 県として考えていくのかは、元気な高齢社会をつく るために大変大きな問題だと思います。これをもし クリアできるような政策的な努力をすることができ ると、自ずから元気な富山県になるのではないでし ょうか。そのためには、大きなものの一つは人間関 係でしょう。人間関係を何らかの形で、例えば世代 関係、親子の関係、あるいは同僚との関係がうまく つくれるような条件をやっていくと、元気になるわ けですから。

今ほどの話はどちらかというと、ボランティアがいちばん取っかかりがいいと言われているのですが、最近、非常に富山県でもNPOが増えてきました。地域ぐるみでテーマがあって、その地域全体をよくしようとか、あるいはその業界をよくしようと。特に地域ぐるみのNPOが非常に増えてきています。私もこれで2年ほどNPOをやっていますが、やってみると、目標が同じで、しかも自分の生活のためではない。その辺のあいまいな人間関係が気持ちいいのです。貢献しているという部分だけで頑張っているようなところがあるのですが、会社とか仕事のうえでの人間関係と性質がまるっきり違います。こういうNPOをもうちょっと応援してもいいのではないでしょうか。

増えてきているというのは、富山県には NPOが多いのですか。

全国的な比較ではちょっと分からないですが、ほんのここ1~2年の現象です。特に地域に根ざしたNPOが新聞に出る頻度がどんどん増えてきて、あれっと思って見ています。市町村合併すると、例えば私が所属している南砺市は、4つの

町と4つの村が一緒になったのですが、大きくなったのはいいけれども、その分だけ人間関係が希薄になるという危機感から、自治振興会などの地域ごとのNPOに近いものが、ここ1~2年でぽつぽつ出てきているのです。今、何でも行政頼みではなくて、こういう方向で地域づくりをしようという中心になっているのは50~60代で、それはいい傾向ではないかと思います。もう少し結果が出たら、もっとアピールしてもいいという気がします。

抽 井 まちづくりなどですか。

まちというよりも、むしろ旧の小さな集落や町など、小さな単位のところが多いです。その地域全体をカバーするような「○○をよくするNPO △△」といったものは、地域ごとに増えてきています。

MPOも、経済的にはなかなか大変ですよ

あまり規模を大きくしなければいいのです。欲張りすぎて、どんどん広げると大変なので、私どものグリーンツーリズムは、10年単位でものごとを考えましょうということを申し合わせています。じたばたするのはやめておこうと。それより若い人たちをどんどん引っ張り込んで、気長にバトンタッチしていけばいいではないかと。

奥野さんは多面的な活動をされているでしょう。そうすると、こちらにもあちらにも奥野さんがいるのだけれども、メンバーの重複はないのですか。もう少しすそ野をきちっと広げるようになればいいのだけれども。

グリーンツーリズムについては、それを 目指しているNPOがいくつもできてきまし たから、それをネットワークする本部になるつもり にしていますし、そうしないといけません。それと、 専任のパートを置いて早く事務局体制を作り、情報 収集や連絡調整をして、小さなNPOも育てようと思 っています。北陸、新潟まで含めて4県にそういうグループがずっと活躍しています。「まち・むらネット北陸」という組織も作っていますし、全国組織もだんだんできつつあります。特に町の中にあって大都市にもあると、都市との交流が非常にやりやすくなるのです。地方はそういう受け皿のNPOがどんどん増えはじめましたし、田舎暮らしも支援しようではないかとなりつつあるのですが、大都市にそういう組織がないために、アピールする方法がまだ寂しいのです。

今、NPOが人々の接着剤になるための一 つのアソシエーションを作るというのは、 大変有力なやり方だと思います。

もう一つ、私が提案したいのは、新聞の投書欄を もっと活用することで、これは県が組織的にやれば できることです。その背景を言うと、旬報社から 『日本労働年鑑』がずっと出ています。これは、もと は大原社会問題研究所から出ていたのですが、1920 年代の大正デモクラシー期に、高野岩三郎という日 本の経済統計の先駆者が大原社会問題研究所の所長 に就任して、そこで労働年鑑を編集した。そのとき に、実際にやったのは櫛田民蔵という経済学者です。 櫛田民蔵が、来る日も来る日も高野岩三郎に「新聞 を切り抜きなさい」ということばかり言われるから、 「先生、いいかげん教えてくださいよ」と言ったら、 「君、勉強しているじゃないか」と言われたというの です。これは一つのエピソードですが、それほど新 聞の紙面をきちっと整理してフォローすることは大 変ですけれども、そのことが大きな社会の動きを整 理することになると思うのです。

その中の特に投書に特定化して、新聞に採用されるのはその中のある部分でしょうが、もし可能であれば、そうでないものも含めて分類しながら整理すると、世の中の動きや、庶民からの具体的な提案はものすごくたくさんあると私は思います。それが例えば自殺率を低減するための手がかりであったり、あるいは経済を活性化するための手がかりであったり、いろいろなことの手がかりを含んでいるのだろうと思います。もっと系統的にそれを整理すると、お金をかけないでいろいろな手がかりが見えるのではないか。そのためには来る日も来る日も長期間に

わたって整理しないとものにならないと思います。

私どもも、どうしてもパートの女性を一人だけ事務局に欲しいのは、おっしゃるような新聞の切り抜きから始まった情報収集と、連絡調整のネットワークを早く作りたいからです。いろいろな動きがあるのですが、それを行政がやると、みんな1年か2年で人が代わってしまってだめなので、NPOを作ろうということになったのです。そうすると、なおさらそういう責任があるなと思いますし、やはり情報収集と整理、ネットワーク化だなと思っています。

先ほど言った労働年鑑は全部、新聞の切り抜きで編集しているのです。ものすごい情報量です。だから1920年代当時の労働に関する問題を知ろうと思うと、あれ抜きに知ることはできない、生のデータです。

地元紙と、全国紙のローカル版もあるわけでしょう。そういうところの投書をきちっと整理すれば、 ものすごい情報量だと思います。

ス そうですね。投書欄などが非常に盛んなのは地元紙です。全国紙の地方版は紙面が小さいですからそれほどはないですが、全国紙は三大全国紙をはじめ、あることはあります。どのくらいのシェアを持っているかというのは話は別ですが、なかなか面白いお話だと思います。

ある編集方針で項目を整理して編集すると、役に立つと思います。ただ漠然と切るだけだったら意味はないので、ある方針に従って継続して編集しないといけません。

タインターネットは非常に便利なのですが、高齢者にはなかなかなじみにくくて非常に苦労しています。やはり、新聞のメディアのほうがいい。

神 井 今、奥野さんが人を雇いたいとおっしゃ ったけれど、私も関係しているところに卒 業生を斡旋したりしているのですが、かなりミスマ ッチなのです。意外にいい人材がいるのだけれど、つなぐのはなかなか難しい。例えばお茶大だと、わりと専業主婦になる人が多いのですが、専業主婦をやりながらずっと活動してきた人はけっこういます。そういう人を、NPOや団体の仕事に何人かつないだのですが、なかなか難しいのです。何かやりたい、そして家もいいから、別にお金はそんなになくてもいい、生きがいが欲しいという女性が、中年でちょうど子育てが終わったぐらいでたくさんいるので、そこをうまくつなげると、NPOなども展開できると思うのですが。それから女性の場合に難しいのは、夫の転勤です。例えば高齢社会をよくする女性の会でホームページを作ってくれていた人がいたのですが、夫が海外に行ってしまった。

富山の場合で困ることは、そういうことに飛び込んできて協力してくれるのは、県外で生活した人か、県外育ちの人だということです。地元の人は、お金にならないNPOやボランティアをやると、周囲の目がうるさいのです。一銭にもならないことを、何を本気でやっているかということで、いろいろなプレッシャーがかかります。今、だいぶ変わってはきましたが、悲しいかな、富山県には専業主婦という感覚はあまりないぐらいで、とにかく働けと。そうすると、NPOやボランティアというのは、男性はそうでもないのですが、女性の場合はそれが大きい壁かなと思います。

れ話も尽きないようですが、時間もそろ そろまいってきたようです。いろいろなお 話を伺い、貴重なご提案をいただきました。このあ たりで、理事長からご感想などをお願いします。

皆様方から、いろいろなお話を聞かせていただきまして何よりです。この機会に、高い立場からのご意見、幅広い立場からのご意見をいただいて、人間的に長生きができてよかったと言える社会になるよう、社会全体として伸びるようないろいろな仕組みをもっと考えてみる必要があるのではないかと感じています。これから男性も女性も誇りを持って生きることが必要になってくると思いますが、具体的にどのようにしたらいいのかは、率

直に言ってよく分からないところがあります。いろいろなご意見があると思いますが、もっとこのようにして頑張りなさいという率直なご意見などを先生方からお聞かせいただきますと、大変ありがたいのです。

富山県はいろいろな意味で、日本でも素晴らしい 県になってきましたが、まだまだ直さなければいけ ない点はたくさんあるわけで、今日もいろいろご意 見をいただきました。もっとみんなが長生きして楽 しく頑張れるように、女性や社会全体、富山県全体 がもっと伸びるような、みんながもっと元気になる ような仕組みになることが大事ではないかと痛感し ます。いろいろな施策を富山県なりに実施してきま したが、対岸諸国とのつきあいや世界的な伸び方、 それからまず人間的に富山県がよくなることなど、 やらねばならないことがずいぶんあるのではないか と思っております。

今日は大変いいお話をたくさんいただきました。 いろいろなご提言がありましたが、どうぞ今後とも 富山県をさらに愛していただき、ぜひこれから富山 がいろいろな面で今後とも発展しますように、いろ いろご指導をお願いできれば大変ありがたいと思い ます。

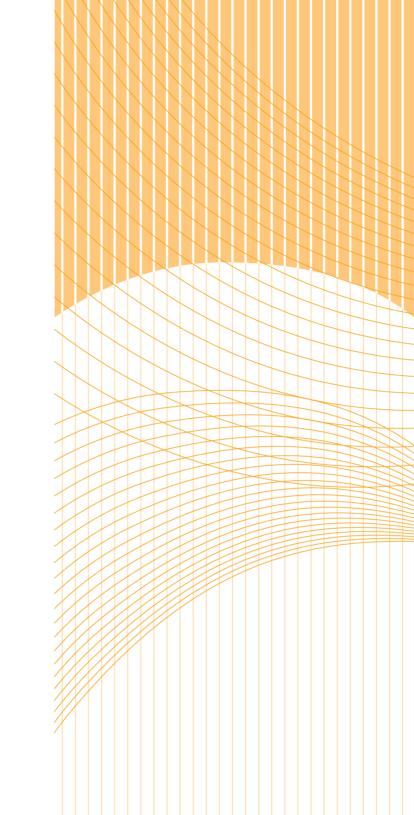
今日は大変長時間にわたりまして、熱心にいろいるとお話しいただきまして本当にありがとうございました。今後ともよろしくお願いしたいと思います。

八 木 それでは、以上で今回の会議を終了しま す。長い間ありがとうございました。

中 沖 本当にどうもありがとうございました。

## 「立山倶楽部」会議テーマ

	実 施 時 期	実 施 場 所	テ ー マ
第1回	平成6年6月18・19日	立山高原ホテル	とやまから21世紀
	木村尚三郎、伊 勢 彦 信、 佃 一 輝、山 本 卓 眞	大浦 溥、黒木靖夫	、今野由梨、鈴木忠志
第2回	平成7年7月25・26日	宇奈月国際会館	とやまから 21 世紀 ~とやまから世界へ~
	木村尚三郎、伊 勢 彦 信、 東 郷 茂 彦、中 條 高 徳、		、高坂正堯、今野由梨
第3回-	平成8年10月3・4日	立山高原ホテル	とやまから 21 世紀 ~ゆとりと豊かさの質を問う~
	木村尚三郎、伊 勢 彦 信、 湯川れい子、吉 岡 明、	今野由梨、丸田賴一 吉田光男	、森下慶子、山本阜眞
<b>等 4 同</b>	平成9年10月1・2日	立山高原ホテル	とやまから 21 世紀 〜文化と交流の時代へ〜
第4回	木村尚三郎、青 木 保、 丸 山 茂 徳、森 洋 子	猪口 孝、北本正孟、	、福原義春、松岡正剛
第5回	平成10年10月6日	宇奈月国際会館	とやまから 21 世紀 ~そうだ、とやまへ行こう~
	木村尚三郎、島森路子、	福原義春、丸山茂徳	、涌井雅之
第6回	平成11年11月18日	富山国際会議場	とやまから21世紀 ~21世紀の女性そしてとやま~
37 0 Ed	木村尚三郎、赤 井 士 郎、	岡本真佐子、佐 伯 順 子、	、野村乙美、宮下孝晴
第7回	平成13年10月11日	黒部市国際文化センター	21世紀のとやま像 ~住んでよし、訪れてよしの富山県づくり~
	木村尚三郎、石 鍋 裕、	白石真澄、深井晃子、	、吉田忠裕
第8回	平成14年10月15日	富山全日空ホテル	富山を世界の舞台に
	木村尚三郎、片倉もとこ、	セーラ・マリ・カミングス、	、谷 口
第9回	平成15年10月14日	富山全日空ホテル	これからの富山県 これからの人材育成
ж	木村尚三郎、數 土 文 夫、	戸田奈津子、マリ・クリス	スティーヌ、望月照彦
第10回 -	平成16年9月29日	富山全日空ホテル	とやまの文化力を高める
	木村尚三郎、金 田 章 裕、	佐藤陽子、吉田忠裕	
第11回 -	平成17年11月17日	富山全日空ホテル	子どもの教育目標をどこに置くか
	木村尚三郎、小 林 登、	佐藤友美子、西 舘 好 子、	、米田祐康
第12回 -	平成18年10月17日	富山全日空ホテル	元気な高齢社会のために
	石川純子、奥野達夫、	袖井孝子、濱口晴彦	·



#### 財団法人富山県ひとづくり財団

〒930-0018 富山県千歳町1-5-1 (富山県教育記念館2階) TEL.076-444-2000/FAX.076-444-2001